

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 鈴木 開

本論文は、17世紀前半に朝鮮と清との国際関係（以下、朝清関係）が成立する過程を、清の前身である後金との関係にまでさかのぼって考察したものである。朝清関係の成立は、1627年と36-37年の2度にわたる後金ないし清の朝鮮侵攻の結果として、朝鮮にとっては従来の明との冊封関係に代わる新しい国際関係の成立を意味する。と同時にそれは、東アジアの視点からみれば明清交替という国際秩序の一大変動の結果でもあった。その意味で、朝清関係成立過程の検証は朝鮮史のみならず東アジア史の重要な研究課題である。しかしながら既往の研究は、これまでこの点に自覚的に取り組むことのないまま明清交替が及ぼした影響を過大もしくは過小に評価することに終始し、その結果、十分な実証を欠いた歴史理解が長らく通説的位置を占めてきた。本論文は、かかる研究の現状を打開すべく、朝鮮と後金ないし清との間の外交交渉の推移を新出史料をも駆使して丹念に追跡し、新たな歴史像を提示しようとした。

序論と結論を除くと本論文は大きく4部から構成されており、第一部（第一章～第三章）は後金成立（1618）から後金の朝鮮侵攻である丁卯の乱（1627）直前まで、第二部（第四章～第六章・補論）は丁卯の乱から1630年まで、第三部（第七章～第九章）は1631年から清の朝鮮侵攻である丙子の乱（1636-37）直前まで、そして第四部（第一〇章～第十一章）は丙子の乱以降、というように時系列に沿って朝鮮と後金（清）との外交交渉過程が取り上げられている。そしてそれら各部各章での考察を通じて、この分野の研究を大きく前進させる成果をあげたものと評価できる。たとえば、これまでほとんど不明であった丁卯・丙子の乱の戦間期における朝鮮と後金との外交交渉の具体的内容を明らかにした点、通説とは異なり光海君代（1608-23）から仁祖代（1623-44）にかけての朝鮮の対後金外交に連続性・一貫性が認められることを論証した点、後金と対抗するために椴島および朝鮮国内で活動した明将毛文竜の後継勢力の動向を詳細に解明した点、後金（清）側における朝鮮の位置づけをモンゴルとの比較を通じて論じた点などを指摘できる。さらに従来ほとんど関心が払われることのなかった朝鮮使臣の報告書類（鄭文翼「以金国回答使在瀋陽啓」〔1628〕など）や日記類（魏廷詰『瀋陽往還日記』〔1631〕など）の史料としての重要性を喚起し、それらを積極的に活用した点、『満文原檔』『満文老檔』といった満洲語史料をも慎重かつ適切な手続きのうえで有効に活用した点など、この分野の研究における史料面での貢献として評価されるべきであろう。

後金・清との外交交渉にのみ焦点を絞るすぎたためにその背景にある朝鮮国内の政治状況や政策論議などへの目配りが必ずしも十分でない点、対後金・清外交と併せて考えられるべき朝鮮の対日本外交が捨象されている点、叙述・形式面で工夫の余地を残している点など、今後さらなる改善が期待される部分がないわけではないが、いずれも本論文の価値を大きく損なうものとはいえない。よって本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績として認めるものである。